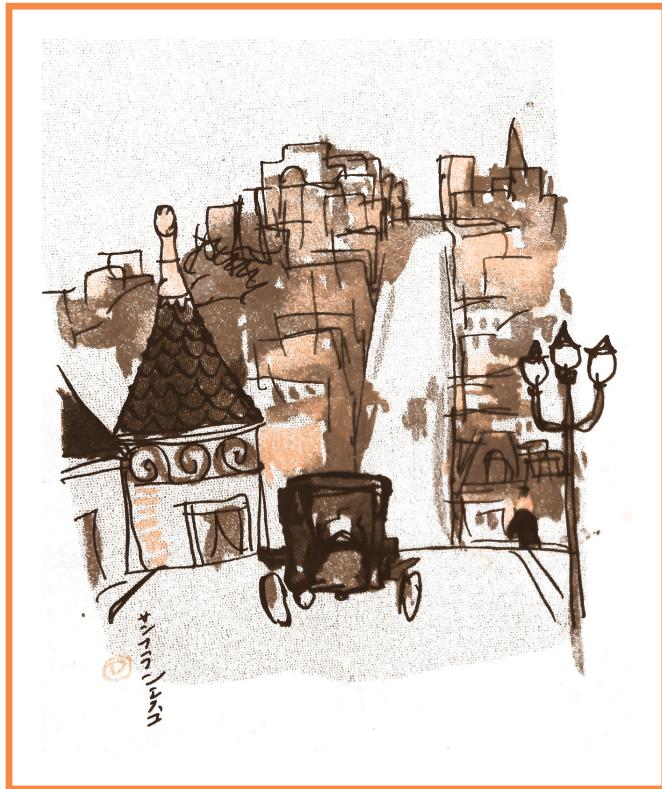


昭和六十三年十二月二十八日第三種郵便物認可
令和八年二月一日発行(毎月一回一日発行)第四五五号

花鳥諷詠

二月号



花鳥諷詠

2月号 (455号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠[®]

令和8年2月 ■ 第455号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	井上 泰至	2
	東構 東子	4
この人の作品	小浦 瞭子	7
一頁の鑑賞	上迫 和海	8
	武井 禎子	9
『虚子俳話録』研究 (2)	抜井 謙一	10
新刊紹介		14
特別インタビュー		
山田閨子氏に聞く		
深見けん二の世界 (2)	井上 泰至	16
国際俳句シンポジウムレポート		
熱帶のハイカイ (俳諧)		
—— ブラジル日系移民俳句にみる虚子流国際俳句の構想		
	中矢 温	19
難読季題練習帳 (二月)	井上 泰至	22
鎌倉だより		
鎌倉の虚子をたずねて -その二-	長谷川楳子	24
卯浪		26
風報		27
地区行事開催日程表		31
編集後記		32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」(「ホトトギス」大正2年7月号)

花鳥諷詠選集

井上泰至選

特選五句

秋晴の天に高さのなかりけり

うきは 金子

清 黙

できるだけ空の近くへ干大根

市原 飯塚

咲 子

人去れば深秋の風膨らみぬ

高松 岩瀬

由美子

諸鳥の声の行き交ふ神の留守

岡山 右田

清 美

もう少し海眺めたき小春かな

長門 大谷

水環子

二句短評

一句目——俳句は時に強い否定の言いまわしが、大きな効果を生む。この逆転の発想が、見えないものまで我々に見せてくれるから面白い。

二句目——生活の中に祈りがある。「できるだけ」に大根一本一本を大切にする心がある。まるでお日様に願をかけているかのように。

入選六十句

雲淡く纏ひて高し十三夜

姫路 小林 智子

山茶花の咲き継ぐ日和散る日和

加古川 岩城 久美

癒えし眼に空新しき小春かな

福岡 梶原 敏子

カレンダー配布十一月の旬座

十日町 小川 則子

会場の運座に揺るる芒の穂

宍粟 徳田 紫紋

石蕗枯れて能登は海鳴り山鳴りに

輪島 向佐 ち子

もみぢ葉の二枚を持ちて見舞ひけり

久留米 野口 桂子

投函のポストのひびき今朝の冬

倉吉 足羽 敬子

海もまた色を違へて片時雨

高松 渡部 全子

木でありしことをつくづく萩を刈る

美作 駿河 亜希

紐の縫りはつきり見えて柿吊す

松原 加藤 あや

鳴の数かぞへ一日の幸おもふ

高知 山中 倫雄

夙や山湖渺々たるままに

高松 岡内 公子

過ぎ去つてみればみな此事月を見る

太宰府 川路 泰子

箕面 田村 文代

新米の粥食む母の笑みこぼれ 稲城 藤田恵美子
神の旅ひと筋のみの龍吐水 朝霞 鈴木 月惑
戴きし百寿の祝ひ小鳥来る 上越 橋詰シズエ
存分に生かされ生きて木の葉髪 高松 島谷うた子
一切の誕生ケーキ喜寿の秋 伊賀 吉川 博子
長々とコンテナ列車豊の秋 北海道 安田 豆作
七草のひと色もなき狭庭かな 鳥取 石尾 正子
句仲間と歩む句の道冬ぬくし 泉大津 多田羅紀子
これよりは風のものなる木の葉かな 神戸 玉手のり子
柏手を揃へ着席月の客 鹿児島 手打 桃果
二天門抜けて墨堤小春かな 横浜 永澤 功
十月や十月桜盛んなる 高知 長田 貴代
冬夕焼月白々と昇りゆく 渋川 後藤 香澄
下り行く小さき鮎も錆び色に 阿南 谷川 宗和
秋日傘太陽少し軽くなり 津山 池田 純子

桺の匂ふ小径や里帰り 福岡 森田寿美子
桺の花や鬼門は暮れ易く 福岡 井上 京子
雪吊の仕上がる仔細見守りぬ 金沢 矢木 桂子
初時雨病癒えてもたよりなく 伊勢崎 飯塚 徳明
新米に水加減など心して 行田 細村 雅子
和紙のように晩秋の日の透きゆける 千葉 鈴木真沙枝
北国の日暮は早し秋しぐれ 西宮 山谷 彰子
その先は昔色街酉の市 香川 三宅久美子
千里浜の風のままなる磯千鳥 芦屋 山岸 正子
神木を崇め短き秋惜しむ 柳川 廣松ヨシエ
動くでもなく流れゆく秋の雲 福山 来山 静子
仄や満天の星磨き上げ 我孫子 柳沢いわを
産声を待てる霜夜でありしかな 青森 七戸富美子
落葉踏む音の違ひし二人かな 大分 村上 久子
願ひ事岩に語りて神の留守 安中 吉田 洋子

中天に臥待月の夜明けかな 米子 中村 裕介

しみじみと語ることあり十三夜 糸島 春田美智子

受け取めて前向きに生く木の葉髪 高松 荒井多美枝

しんしんと音無きことも冬の音 三木 松本 幸平

木偶の泣き客も泣きたる秋祭 高知 川田 達子

虎落笛言葉にならぬことばなり 三木 岡本やすし

小春日や隨身門に差す光 鳥取 宮脇 典子

順番のあるかに散りてゆく枯葉 金沢 宮村 啓子

音のなき里となりけり十三夜 高知 前田まこと

冬めくや大川鈍く光りをり 東京 白山 素風

傘寿にも未来はありて竜の玉 加東 藤本かつゑ

冬構して奥能登の村に住む 金沢 西田 梅女

病む人の指白くして冬に入る 横浜 夏野 猫宙

夙の突き当たりには占ひ師 札幌 増田 植歌

● 東構東子選

特選五句

足袋ぬいでふつと私に戻りたる

熊本 西村 孝子

山茶花の垣低くして隣り合ふ

加賀 堀口 紀子

枯れきれば光の無尽 大枯野

高知 川田 達子

木偶の泣き客も泣きたる秋祭

東京 今井名津

二句短評

一句目——着物姿から解放され、足袋を脱いだ時、何かがポンと外れたような、無我夢中の心境から魂が帰ってきたように我にかえった一瞬。さらりと言つて実感がこもつてゐる。共感句。

二句目——垣を低くしたというだけで、お隣りとの関係がよくわかる。気遣いはあるが邪魔ではない。いいつき合いがうかがえる。人柄もしのばれ存間の見事な句。

入選六十句

焦げ加減程良く秋刀魚焼き上がり 浜田 三沢 孝子
雲淡く纏ひて高し十三夜 姫路 小林 智子
癒えし眼に空新しき小春かな 福岡 梶原 敏子
森は今こどもの世界木の実落つ 米原 成宮 伯水
石蕗枯れて能登は海鳴り山鳴りに 輪島 向 佐ち子
蔓引きて余計に通草遠くする 八尾 窪田由紀子
秋蝶の数を見せたる日和かな 山形 布川 國雄
乱れ咲くことにも萩の矜持あり 福山 広川 良子
秋晴の天に高さのなかりけり うきは 金子 清黙
爽やかや敗者に拍手惜しみなく 鳥取 砂流 育子
邪鬼を踏む四天王の眼冷まじき 生駒 山口 廣世
身に入むや崩れ落ちたる投手の背 神戸 金田八江子
藩校に隣る学舎新松子 伊賀 西澤与志子
恋やつれらしき牡鹿の虚ろな目 長岡 安井 里子
人去れば深秋の風膨らみぬ 高松 岩瀬由美子
ふるさとの夕日の色の柿を買ふ 宇部 正司 道子

特選のメール着信菊日和 加賀 正藤 宗郎
秋風に仏の声を聞く古刹 福山 佐藤 浩子
小鳥来てパントマイムの始まり 神戸 岩水ひとみ
啄木鳥の揺らす大樹の一部分 伊賀 松村 咲子
荒縄を自在に杣の冬構 高山 大下 雅子
路地親し文士の旧居朴落葉 鎌倉 緒方 初美
へつつひの火伏のお札冬の虫 高崎 吉井たくみ
終活も兼ねる暮しの冬仕度 千葉 高橋 靖夫
島日和秋天三百六十度 下関 貞包 清子
地震に浮きバス停段差草紅葉 石川 堀口 道子
冬耕や畠ふつくりと持ち上がる 東京 藤岡 詩音
来る年も生くるつもりの種を採る 鹿児島 串間 麻衣
鴨の水尾深き静寂を曳いてゆく 大分 小山さち子
神苑の風を哭かせて鵠の贊 天理 松田 吉上

一球に決まる勝敗冷まじや 金沢 篠島 安子
大仏の大き手の慈悲冬ぬくし 松原 吉村美穂子
時雨るるを承知湖北の旅路かな 泉大津 山田 佳音
子等の声消えし分校銀杏落つ 福岡 野口 明子
人里に熊の脅威の迫る日々 山形 秋山 廣子
鯽起し見つむ漁師の皺深く 千葉 藤田 考成
桜の花や鬼門は暮れ易く 福岡 井上 京子
色のまだ乗り切らぬまま冬紅葉 徳島 吉田 有子
波の音持ち帰りたき小春かな 千葉 駒井ゆきこ
身も口も軽くなりゆく日向ぼこ 高松 宇和川 厚
自由とも孤高の身とも鷹の空 神戸 光山 恵子
初鳴の水脈の白さを重ねつつ 大牟田 森永 清子
袴著の必死に登る長き磴 長崎 山脇 順子
狛犬のどんぐりまなこ神の留守 尾張旭 佐藤 武彦
旅ごころ動かしてゐる秋の海 福山 早間 幸枝

地に還るもののか香少し時雨あと 宝塚 岩崎 洋子
冬支度目安となりし一忌日 東京 柿崎 典子
陸に上げ漁船の手入れ冬日和 松山 門田 安世
足音に足す杖の音小六月 高崎 塚越 章江
告白はワインの新酒乾してより 鳥取 尾田美智子
鳴きながら雁棹になり鉤になり 東京 早坂 洋子
秋潮や台場に志士の夢の跡 高松 佐々木宏風
手水舎の石文なぞる石蕗日和 倉敷 田口ひさえ
遠山の白さも見ゆる冬日和 白山 辰巳 葉流
音のなき里となりけり十三夜 高知 前田まこと
吉兆の雲に乗り換へ神の旅 福岡 井上波津子
北を指す風向計の冬に入る 大阪 中本 宙
裏返る朴の枯葉の白さかな 西宮 宮本 露子
散り終へて時を育てる冬木かな 兵庫 清水貴美代
散紅葉眼下の瀬を回り出す 前橋 戸所 理栄



編集後記

雪よりも眞白き春の猫二匹 虚子

白猫は雪より白く、毛並みが豊かだつたようだ。「二匹」が効いていて、身を寄せ合つて寝ている姿も彷彿とする。初春の光、寒さ、そして猫の体温が全体から伝わつてくる。虚子は決して愛猫家ではない。ではないが、愛猫家を喰らせるだけの写生はやつてのけた。「春の」の位置が絶妙で、天候と白猫とを見事に結節させていい。

●山田閏子氏のインタビューはいよいよ佳境。深見けん二氏の虚子恋いの深奥がうかがえます。

●昨年四月から続いた、虚子記念文学

館の「椿子物語」の世界展も、三月八日の会期末が近づいてきました。

私は、先月号の「虚子名品館」の筆者藻井紫香氏と昨年八月に見学をいたしましたが、深見氏ともご縁の深かつた

千原叡子さんの魅力が、老虚子の心を確と捉えたことが、手に取るようにわかる展示でした。

●虚子は老いたりと言えども、目から色気を失わず、心のしなやかさを持ち続けたようです。先月号でもご案内しましたが、同館で例年行われる虚子生誕記念俳句祭は、二月十五日、展示に合わせた記念講演も行われます。お誘いあわせの上、お出でください。

●昨年暮れの国際俳句シンポジウムのレポートを載せました。書き手の中矢温氏は、若きブラジル俳句の研究者にて、会员ではありませんが、余人を以て代えがたくお願いしました。期待に違わぬ内容となっています。

●次回の鎌倉での全国大会は、九月十

三日(日)、場所は鶴ヶ岡会館(JR鎌倉駅から徒歩五分)で講演会・句会・懇親会を予定しております。前夜祭は行いません。宿は各自でお取りい

ただくことになります。

(井上泰至)

花鳥諷詠 二月号(通巻第四五五号)

定価1,200円(但し、本代は年会費に含む)

年会費 10000円

令和八年二月一日

発行人 井上 泰至

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

T 151
0073

東京都渋谷区篠塚二丁目一八九

シャンブル篠塚二丁目一〇一

電話 ○三三三四四五五一九一
FAX ○三三三四四五五一九一

定休日 水・土・日・祝

郵便番号 ○一六〇一七一八六八二〇

〒112
0014
印刷所 日本ハイコム(株)
東京都文京区関口一一九一二